

ユイのキケンな看護科実習

そのいち 「キヤー！婦人科の内診台」

ガァン！！ そんな効果音が聞こえて来そうな顔で、あたしは手にした綿棒を見つめていた。先っぽの綿は当たりの印に赤く塗られている。

「まさか。そんなはず無いわ。なんであたしが当たりなのよ。」

残りの綿棒を、水島くんから奪い取って見たが、確かに残りの七本には当たりマークは無い。

「そんな！こんなのおかしいわ。ねえ、もう一回やらせて。お願い。」

「なに言ってるのよ、往生際が悪いぞ。」

「そうよ。あたしはくじ運が良いから、大丈夫って言っつて、一番最初にくじを引いたのは、ユイなんだからね。」

「恨みっこ無しの一発勝負だつて、あれほど言ったんだからね。」

「いままで一度も当たって無いんだから、もう観念しなよ。」

そう言っつて詰め寄るのは親友のユカとユキリンの二人だ。

「やっぱりユイってくじ運良いよね。」

「ほんと、ここ一番の大事な処で、当たりを引いちやうんだからね。」

ほんとにこの二人は容赦が無い。こんなピンチに陥ってる親友を、ちよつとくらい慰めてくれたって良いじゃないか。

「じゃあ、次回の実習のサンプルは岡田さんね。皆さん、きちんとテキストで予習をしてくるのよ。貴重な実習の機会ですからね。はい、今日はこれで終了です。お疲れ様でした。」
指導教官の川浦先生はそう言っつて実習の終了を宣言した。

トボトボと一人でキャンパスの中を帰りに向かって歩いていると、ユカとユキリンが追いついて来た。

「ねえユイ、そんなにしょんぼりしないで。お茶しに行こう。二人でおごるからさ。」

「ケーキも付けてくれる？」

「うーん。仕方ないな。付けてあげるよ。」

「じゃあ、行く。」

結局そんないきさつで、三人でキャンパス前の喫茶店に落ち着いたのだ。

ここであたしのプロフィールでも紹介しておこう。

あたしは岡田唯。S大学医学部医療保健学科の二年生だ。医学部なんて言うところちょっと優秀そうに思われるが、あたしの居る医療保健学科と言うのは、医師じゃなくて看護師を育成するコース。その他に検査科っていう検査技師を育成するコースもある。

昔は医学部付属の看護短大だったのが、医学部に統合されただけの部門なのだ。一緒に居るのはクラスメートの大村裕香と長田由紀の二人。入学した初日から気が合って、ずっと一緒に行動してる親友たちだ。

出席番号もあいいうえお順で三人並んで居るし、イニシャルもY.Oで同じなのだ。明るくて陽気な三人組。三人寄れば、という諺通りで、クラスメートや先生から「ワイワイトリオ」などと呼ばれたりもする。

そんなトリオの一角を担うあたしだが、今回はショックが大きい。とてもお茶とケーキくらいで慰められそうも無い。

医学部で医者や看護師に成るためには、沢山勉強して、いろんな知識を身につけ、国家試験に合格しなければならないのは当然の事だ。

でも、それと同時に、実際に患者さんに対して行うさまざまな医療行為を身を持って知り、それを実践できなければ、知識や資格が有っても役に立たない。

その為に実習の時間がカリキュラムに組み込まれてる。

初歩的な処では、患者さんの清拭、洗髪、着替え等の事から始まり、血圧の測定、脈拍測定、採血や注射など、実際に行つて経験を積む。

当然、いきなり本物の患者さんに対して、それらを行うわけにはいかないから、学生同士お互いが患者役になって、実習を行うのだ。

人の体を扱うのだから、体に触れる。触れられる。清拭なんていう初歩の実習でも上半身の場合、胸まで拭いたり拭かれたりする。当然、ブラも取つて、同級生に裸の胸を見せなければならぬ。下半身の場合には、もっと秘密の部分まで、クラスメート同士できれいに拭きあうのだ。

最近では男性の看護師も徐々に増えている。あたし達のクラスでも一割ほどは男子だ。さすがに男女でこういう実習は出来ないから、男子は男子同士で実習をした。

男同士で下半身の清拭っていうのも、ちよつとグロいとは思うが、これも医学の為、将来の為の実習なのだ。そんな事をやったのが一年生の頃だった。

二年生になると、保健学科と医学科が合同で行うカリキュラムも出てくる。その中のひとつに、医療機器検査装置実習というのが有る。

これは、実際に病院の中で使われている医療機器や検査装置の取扱いの実習だ。

清拭や注射、浣腸なんていうのは、道具さえ有れば、学校の実習室で出来る。だけど、MRI、CTなどの高額な医療機器は、実際の病院にしか無い。

このS大医学部には附属病院が有り、大学病院として地域医療の一端を担い、先端医療の研究も行っているから、そういう機器も揃っている。それらを実際に使わせてもらって、構造や操作方法を覚えるのが、医療機器実習なのだ。

だけど、二年生になる時に先輩達から意味ありげにささやかれた

「機器検査実習はキケンって呼ばれてるのよ」

「機器実習はホント、ヤバイよ。」

という言葉の本当の意味は、実際にやる事になって、ようやく解ってきたのだ。

この実習は八人でひとつの班になり、班に一人指導教官が付き、班毎に病院を訪れ、実機を使わせてもらう。

その班の組み方は医学科と保健科がミックスされる。

あたしたちの班は、ワイワイトリオの三人が出席番号順で同じ班に入れられ、検査科の水島くんという男の子と医学科から男性二人、女性二人の四人、男性三名女性五名でひとつの班にされた。

医学科では二年間は教養課程が有って、それから学部に入るから、一緒に実習するのは一つ上の先輩になる。

医学科の男性の中の一人は、あたしのサークルの先輩で、あたしが内心憧れている鮫島さんだったから、組合せを知った時は、ラッキーと思った。

聞いた話だけど、この実習をきっかけにして、医学科の人と付き合い始めた先輩も居るって。もしかして先輩の言った「ヤバイ」とか「キケン」ってそういう良い意味かな。

前期はX線やCT、MRIなど大物の装置の実習をした。こんな大物を学生が簡単に扱えるわけも無く、教える方もそんな事は期待していない。

一応の概要説明が有り、実習として誰か一人がサンプルとなって装置に入れられ、検査の様子を眺めていた程度だった。

サンプルっていうのは、正式には被験者って言う。要するに患者役をやる人なのだ。

サンプルになる人は必ずくじ引きで選ぶ事になっていた。仕事柄と言ってはおかしいけど、現場には綿棒が有る事が多いから、人数分の綿棒を誰かが握って、一人ずつ引くのだから当たりのマークに一本だけ、マジックで綿部分が赤く塗ってある。単純なくじだ。

後期のカリキュラムになり、最初の「ヤバイ」はあたしたちの班の指導教官、川浦先生から告げられた。

「では、来週は婦人科の実習です。婦人科の内診台の取扱を実習しますからね。」

八人のメンバー全員が息を呑んだ。

「先生、それもサンプルはくじ引きですか？」

あたしは思わず、川浦先生に訊ねた。

「もちろんそうですよ。サンプル無しで実習は出来ませんからね。」

先生は笑って答える。

「それは、サンプルに当たったら、このメンバーみんなに、あそこを見られるっていう事ですか。」

「この班には男性も三人居るんですけど、一緒に実習するんですか。」

ユカとユキも慌てたように口をはさむ。

「どの班にも男性は居ますよ。今回は機器実習ですからね。全員平等にくじ引きでサンプルを決めます。男性が当たったら、その人に内診台に乗ってもらいましょう。」

そして行つたくじ引きでは、医学科の柳瀬さんという女性が当たりを引いた。

先生は柳瀬さんに何かを囁いて笑った。

次の週の実習では柳瀬さんは素直に婦人科の内診台に乗った。但し、下着はつけたままだ。上半身はTシャツで、下半身はパンティーだけの姿は、セクシーではあった。

内診台で足を大きく広げられると、柳瀬さんは赤面しては居たが、いくらか安心した表情を見せた。

内診台の操作説明を一通り行くと、先生は男性三人を診察室から追い出した。

「さて、ここからが本当の婦人科の実習よ。柳瀬さんも良いわね。」

先生はそう言うと、柳瀬さんのパンティーをスリりと脱がせた。

そして、婦人科の診察に使う道具を棚から取り出した。

一番目を引くのはクスコ式陰鏡というやつだ。ペリカンの嘴のような形で、金属製の光がいかにもつていう感じだ。

柳瀬さんは、部屋に男性が居なくなったからだろうか、さっきよりリラックスした表情だ。内診台の足置きを大きく開かれ、あそこが丸見えになっても、あまり動揺した様子も見せない。

「じゃあ、これを入れても良いかしら。」
先生が言うと、

「はい、大丈夫です。」

と素直に答え、頷く。

「じゃあ、皆さんに実際の女性器を見てもらいましょう。」

「ここが陰核、ここは尿道口、そしてここが膣口です。周りの大陰唇と小陰唇は解るわね。」
そんな風に説明しながら、綿棒で撫でるように各部を指し示す。

「そのちよつと下に有るのが肛門ですよ。」

さすがにそこは綿棒で触れずに、指すだけだ。

「じゃあ、膣鏡を入れます。大丈夫ですね。」

先生は、もう一度柳瀬さんに声をかけてから、その銀色の道具をゆつくりと柳瀬さんの体の中に埋め込んでいく。そしてゆつくりとネジを回し、それを広げる。

あたし達はポケットと、初めて目の前にする実物を眺めていた。

教科書で図解は見た事が有るが、実物を見るのは初めてだし、まして、今まで同じ班で実習を受けて来た人の性器なのだ。

ユキリンの顔を横眼で眺めると、口を半分開いて、柳瀬さんのあそこを注視している。
こちら、よだれが垂れそうだよ、ユキリン。

そんな皆を見て、川浦先生がカツを入れる。

「ほら、何を見惚れてるの。ポケットとしてるようなら、柳瀬さんと交替させて、この台に乗らせるわよ。」

そんな先生の一声で皆がハッと我に返る。

「一応解説しておきますが、性経験の無い女性の場合には、こういう道具は原則として使えません。理由は解りますね。処女膜というのが有って、それを傷つける可能性が高いからです。」

柳瀬さんは照れる様子も無く、その説明を聞いている。

「今時の事だから、結婚まで処女で居ろっというのも時代錯誤だけど、性行為は大事な事ですから簡単に誰とでもしちゃダメよ。」

先生はそんな解説をする。

「先生。先生は経験があるんですか・・・」

ユキリンがトチ狂って、とんでもない事を言います。が、その瞬間、後頭部にユカの張り手が飛ぶ。

「ユキリン。なんて事を言いだすのよ。」

「あら、いいのよ。あなた達もそういう好奇心を持つお年頃ですものね。」

川浦先生は大人の余裕でにこりと笑う。

この先生、三十代半ば。あたしたちの先輩で、この附属病院で看護師をしながら非常勤講師として私たちの指導をしている。大人の雰囲気を持つ不思議な美人だ。全く男性などに目もくれない聖女のようにも見えるし、男を知り尽した妖婦にも見える。

「私もあなた達くらい年頃から、いろんな経験をして来てるのよ。だから、経験者の忠告はキチンと聞きなさいよ。」

そうやって、余裕そうに微笑む。

あゝ、あたしたちにはとても真似が出来ない、大人の女だ。

先生はさらに、鑿鏡で押しひろげた内部をペンライトで照らし、解説を続ける。

「ここが子宮口です。妊娠中絶の時には、この部分を拡げて、金属製の鉗子で中から胎児を掻きだすのよ。当然母体も傷つくし危険だわ。そんな事を経験しないように気をつけるのよ。」

そう言いながら、綿棒の先で柳瀬さんの子宮口に触れて見せる。

この神秘の光景は、なかなか普通の人には目にする機会は無いだろう。綿棒の先が、柳瀬さんの体液で徐々に湿って行くのまで観察出来る。

「あなた達の体にも同じものが付いているんだから、自分で自分のものを鏡に映して、しっかり観察してみるのね。」

そして、鑿鏡を閉じると、ゆっくり柳瀬さんの体から引き抜いた。

銀色の器具が体から離れる瞬間に、粘液がちよっと糸を引いたのが、私の目に焼きついた。神聖だけどいやらしい光景だった。

先生は器具を片付けると、柳瀬さんの陰部を脱脂綿で拭いてあげて、内診台から降りるのに手を貸す。

「性経験が有るっていうのは解ったけど、きれいな性器ね。あまり回数してはいないよね。」

「はい。今の彼氏が初めてで、付き合ってからまだ半年くらいですから。」

「そう。その割には落ち着いてるわね。内診なんて、どんな人でも最初はじたばたするものよ。」

「あの、実は、内診も経験済みなんです。彼氏が同じ医学部の人で。実習って言われて、こういう事をされた事が有るんです。」

「そうなの。うらやましい彼氏ね。あなたも何かさせてもらったのかしら。」

「はい、前立腺の触診をしました。」

「あらあら。最近の学生はそういう勉強は熱心ね。まあ、それも経験のうちよ。」
と、まあ、そんなやりとりがあったのだった。

その後、女性五人でお茶をした時に、柳瀬さんから教えてもらった。

「先生ったら、男性の前では脱がせないから、勝負パンツをはいて来なさい。なんて言ったのよ。」

男性の前では、っていうことは、その続きが有るんだって解ったから、心の準備は出来たの。それにああいう格好で彼氏に見られた事も有ったし、彼氏のペニスを入れられた事だつて有るんだから、あなた達に見られるくらいは、大丈夫よ。」

「ええっ、でも、他人に見られるなんて、恥ずかしくて嫌じゃないですか。」

「何言ってるの。私は医者になるのよ。患者さんにこういう事をさせるのに、自分が嫌だなんて言えないじゃない。」

それに女性なら通る道の主流は、やっぱり結婚して、セックスして、妊娠して、出産して、子供を持つものっていうのが一般的でしょう。そういう意味で婦人科は病気にならなくても、いずれは経験するモノでしょう。出産の為に医者に行けば、見ず知らずのお医者さんの前で、さつきのような事をしなきゃならないのよ。」

「さすが経験者。」

「偉いでしょう。エッヘン。」

「あたしなんかまだ膜付きだもの。」

「あら、ほんとにそうなの。もう知ってるって顔に見えるけど。」

「ホントですよ。だれかい人が居たら紹介して下さいよ。」

「いい人って、膜を破ってくれる人ってことなのかな。」

「キャー、やだ。そんな直接的な言い方しちゃ。」

なんて、女同士のあられも無い話で盛り上がったのだ。

「それよりも、恥ずかしいっていえば、お尻の方が恥ずかしいかな。」

「お尻ですか。」

「そう、お尻の穴。肛門の方ね。あなた達も私を見たでしょう。婦人科のすぐ近くだけど、普通は見せるものでも触られるものでも無いでしょう。」

セックスとは別物で、排泄の為の器官だしね。

痔とか腸の病気で無ければ、一生他人には見せないものだけど、あそこのご近所だから、つい目に入ったたり、触ってみたくなったりする人も居るのよ。最近では、アナルセックスなんて言うのも、一般的とまでは言わないけど知られて来たし、変わった趣味なんかも、それなりに認知されて居るものね。」

「えー、やだなあ。そんなの。変わった趣味なんて。ヘンタイって事でしょう。どんな事

するんです。」

「そうね。アナルセックス以外だと、浣腸するのが好きっていう人も居るみたいよ。」

「柳瀬さんの彼氏さんも、そういう事するんですか。」

「私の彼は、あんまりそんな事はしないけど、やっぱり男同士の下ネタだと、そんな話でも盛り上がるらしいわ。」

「えー、あんまり、って事は、ちよつとは、って事ですかあ。」

「どんな事するのかなあ。お医者さんごっこかな。」

ユカとユキリンが二人でつつこみを入れる。

「それはないしょ。秘密の実習よ。」

柳瀬さんは余裕で微笑んで見せる。

「そういえばさっきも、前立腺なんて言ってたもんね。きっと彼氏さんと、あんな事やこんな事をいろいろと二人つきりで実習してるんだ。」

「きゃー、いやらしい。うらやましい。あたしは、頭の中でいろんな想像をしてしまった。どんな彼氏さんなんだろう。」

「今なんかネットでアダルトのページを検索すれば、いっぱいそういう画像も出てくるものね。それこそ、さっきの実習で私がやってたような事が、無修正の画像で出てるのよ。」

「やっぱり男の人って、そういうのに興味があるんですね。」

「浣腸なんて、ウンチが出るだけなのにね。汚くて臭いだけなのに、そんなのが好きなんて、やっぱりヘンタイですよね。」

「でも、女の人に浣腸して、恥ずかしがらせたりするのが良いつていう趣味も有るらしいわ。」

「まあ、そうやっていじめてみたいというのは、解らないでも無いけどね。」

「キヤー、エッチー。やだ。サドだ、ヘンタイだ。」

医療関係者の女同士だから、周囲に聞きとがめられればかなり危険な会話が飛び交う。

その晩、あたしは川浦先生に言われたとおりに、自分のあそこを鏡に映してみた。

昼間見た柳瀬さんのと同じものが、あたしにも有った。さすがに陰鏡は無かったし、有ったとしても挿入して拵げしてみる勇氣は無かったけど、外側から見える部分は、しっかりと手で触れてみて確認した。

喫茶店での話を思い出して、お尻の穴も観察してみた。教科書の図解と同じモノが見えた。指先でそつと触ってみたり、力をちよつと入れてみたりすると、ヒクヒクと動く。

自分で見ているだけでも、ちよつと恥ずかしい。一年生の時の浣腸の実習を思いだしてしまった。

後で聞いたら、ユカもユキリンも、あたしと同じようにちゃんと宿題をやったそうさ。

「どうだった。」って聞いたら、三人とも「柳瀬さんのおんなじだった。」って言ったから「じゃあ、あたし達みんなおんなじカッコのものが付いてるんだね。」って笑った。

その数週間後の話だ。

実習が終わり、次週の予定が先生から告げられた。

「来週は消化器内科です。大腸の内視鏡の実習ですよ。」

この前の喫茶店での話が、頭の中を通りすぎた。婦人科よりも恥ずかしいっていうお尻の穴からカメラを入れる実習なのだ。

そして話は、冒頭のくじ引きシーンに戻る。

喫茶店の奥のいつもの席で、コーヒーとケーキに手も出さない半べそのあたしを、二人が慰めてくれる。

「ねえ、ユイ。川浦先生は何にも言わなかったの。勝負パンツをはいて来い、とか。」
「何にも。」

「大丈夫だよ。この前の婦人科とおんなじでさ、男の子には機械の説明だけして、それから実習って事になるよ。」

「そんなんでもヤダ。あんた達にお尻の穴やお腹の中まで見られるんだよ。」

「そんな事言っちゃって。柳瀬さんなんか、あんなに潔くサンプルになったじゃない。」

「だって、柳瀬さんは経験者だもん。あたしなんか未経験の膜付きなんだからね。」

「なに言ってるの。お尻の穴に膜は付いてないわよ。それに一年の時に、浣腸実習だってやったじゃない。」

「あの時は、あたしはジャンケンで勝って、する方だったもん。」

「ええっ。じゃあ浣腸も未経験なの。」

「そうだよ。便秘したって二三日で自然に出るし、そうでなきゃお薬で効くし、お尻からなにか入れたりした事なんて、生まれてから一度も無いんだからね〜！」

「そんな、偉そうに言わなくてもいいじゃない。じゃあ、前も後ろもヴァージンか。」

「なによ。そんな言いかた、いやらしい。どうせ膜付きですよ。」

「ほんとにくじ運やらジャンケンやら、強いよね。まあ、誰でも初めての体験は有るものよ。ここでしなくても、いつかはそういう経験をすることになるよ。覚悟を決めな。」

「ヤダ、ヤダ、絶対にヤダ。お尻の穴からカメラ入れるなんて、恥ずかしくて死んじゃうよ。」

そんなふう慰めてもらいながらも、内心では二人の言う通り、女性だけの前での実習

だと、なんとなく思いこんでいた。

そのに 「ええっ！事前処置っ！」

そして当日。

実習の時間、班の皆が川浦先生の前に集合した。あたしは前日に卸した勝負パンツをはいていた。鮫島先輩に見られる事を想定して、日曜日に買ったカワイイやつだ。

「先生、勝負パンツはいて来ました。」

「あら、そんな事しなくても、今回の実習のサンプルには、きちんと専用のウェアが用意して有るのに。」

あつさり、あたしの宣言を無にして、先生が差し出したのは、紙製の検査用パンツと人間ドッグの患者用のミニワンピースくらいの丈のガウンだった。

「今日の実習は難しい実習だし、時間も掛かるから。残念だけど勝負パンツは脱いで、これを着てちようだいね。」

内視鏡検査を行うケースは色々有るけど、今日は人間ドッグの患者という設定で行いませからね。」

手渡されたパンツとガウンを手にも、更衣室に追いやられたあたしは、いきなりのショーツに動揺したままだった。この男女兼用の紙パンツは内視鏡検査用のものだ。お尻の部分に穴が開いていて、パンツを脱がなくても肛門が出るようになってる。

つまり、これをはいて皆の前で診察台上がれば、皆にお尻の穴を見られてしまうのだ。さらに、着替えて戻ってきたあたしに、次のショーツが待っていた。

「じゃあ、皆さん。こちらの処置室に入ってください。」

班の全員、男女混合の八人が部屋に入り、ドアが閉められる。

「はい。じゃあ、岡田さん。このベッドに上がってね。」

ええっ。水島くんも鮫島先輩も居るんだよ。男性は別じゃないの。

「先生。あの、男女別じゃ無いんですか。」

「何言ってるのよ。この前の婦人科とは違いますよ。消化器内科には男女の別は有りません。直腸だって肛門だって、男性にも女性にも有る器官ですからね。」

そんな事は言われなくても解ってる。

問題はそうじゃなくて、あたしの肛門をこの七人に見られちゃうっていう事なんだけだな。先生に促されて、ぐずぐずとベッドに上がる。先生の指示の通りに、皆に背を向けるよ

うに左側を下にして横になる。膝を抱えてちよつと丸くなるような姿勢にされる。

壁の方を向いているので、皆と視線を合わせることが無いのが、ちよつとだけ救いだ。これで顔を見られてたら、明日から顔を合わせられない。

なんて、余計な事を考えて居ただけ、さらにショックは続く。

「この処置室では、内視鏡検査を行う前の、前処置を行います。」

えっ、ちよ、ちよつと待って。前処置。それって、

「腸の中には便が入っているのが普通です。入院患者などの検査だと、前日からの絶食や経口の下剤などで腸を綺麗にしますけど、今日はそういう時間の余裕がありません。

人間ドッグなどの外来の患者さんには、浣腸をして、腸の中のものを出してもらおうのが一般的な処置です。」

やっぱり、そこからやるの。

「岡田さん。今日はお通じ有った。」

「いえ、昨日の朝以来、無いんですけど。先生。ほんとに、ここで浣腸されるんですか。」

「そうよ。これも実習のうちですからね。それに、もしも前処置無しでカメラを入れたら、あなたのお腹の中の便を、皆に見られちゃうわよ。カメラだって入って行かないし、便で汚れてしまつて、腸の内壁の観察も出来ないでしょう。お腹の掃除も一連の処置の内なのよ。」

え〜ん。やっぱり、そうだよ。理論的には解る。カメラを入れる前には、浣腸して腸を綺麗にしなきゃいけないのは。

でも、あたしが実際に浣腸されるのは、別の話だ。しかも、皆が見てる目の前で。

「では、こういう処置も実習のうちですから、実際に行ったり観察したりして勉強するのよ。」

保健科の人は一年の時に、浣腸の実習をしたわね。医学科だと座学だけで基礎実習はしませんね。

こういう機会だから誰かにやつてもらいましょう。どう、鮫島くん、やつてみる。」

ええっ。鮫島先輩が。あたしに浣腸するの。

え〜ん。先輩に浣腸されるなんて、恥ずかしくて死んじゃう。

でも、何にも侵入した事の無い肛門の、初めてを先輩に捧げるのも良いかな。

馬鹿馬鹿！何言ってるの、浣腸されたらうんちが出ちゃうんだよ。先輩にお尻の穴を見られて、浣腸を入れてられて、うんちする為にトイレに行くんだよ。

なんて、頭の中でボケとツツコミの二役がグルグルまわっている。

「まあ、男性にそういう処置までさせるのは、岡田さんも可哀想ね。柳瀬さん、あなたがやつてください。」

さんざん人を不安にさせてから、先生はそう言って柳瀬さんを指名する。

柳瀬さんにされるなら、あたしは逆らえない。この前の婦人科の時の、柳瀬さんの態度

は立派だったもんね。

「今回は一般的に使われる、ディスプレイの浣腸です。量はちよつと多いけど、市販のイチジクタイプと同じだから、誰でも簡単に出来るわ。」

柳瀬さんは、先生から手渡されたディスプレイの200ccの浣腸を、ためらいも無くあたしの肛門に挿入しようとする。

「ちよつと待ってね。一応処置の前に先端に潤滑剤を付けた方が良いわね。」

初めてなんだから、優しくしてね。なんて、あたしは心の中でささやく。

「保健科の実習では説明して有りますけど、注意する点がいくつか有りましたね、長田さん、覚えてる。」

先生はそう言ってユキリンを指名する。

「えーと。女性患者の場合には、別の穴に間違つて入れないように、良く見て入れる。ですか。」

ユキリン。いきなりそんな答えなの。

「そうですね。それも大事です。皆さん、良く観察していてね。きちんと肛門を確認して挿入するのよ。」

先生がそんな事を言うから、皆の視線があたしのお尻の穴に集まる。やだ。鮫島先輩も水島くんも、そんなに見ちやダメ。ユキリンがいきなりあんなことを言ったせいだ。プンプン。

「その他にも、いくつか注意することは有ります。挿入する深さとか、液の温度などです。理由は。大村さん、言ってみて。」

「挿入する深さは、入れ過ぎると腸を傷つけるおそれが有るからです。液の温度は、適温で無いと刺激が強くて、しつかり効く前に便意が我慢出来なくなったり、患者さんに不快感を与えるからです。」

「そうね。特に深く入れ過ぎるのには、注意してね。効かなかったり我慢できなかったりするのよ、やり直し出来るけど、傷つけると大変よ。ちよつと葉塗ってっていう箇所じゃないですからね。」

先生がそんな説明をしている間に、柳瀬さんはパンツの穴の部分を上げ、あたしの右側のお尻を持ち上げるようにして、肛門を上げる。あっ、先端がお尻の穴に触れる。くすぐったいような変な感じだ。チューブがスルスルと入って来る。痛くは無んだけど、なんか嫌な感触。

規定の長さのチューブが入り切ったのかな、挿入が止まって、柳瀬さんの手がお尻から離れる。

「じゃあ、液を入れてください。岡田さん、良いわね。」

先生の言葉に促されて、柳瀬さんがゆっくりディスプレイ浣腸を押す。チュルチュルと生温か

い液体があたしのお腹に流れ込んで来る。

ヤダ、気持ち悪い。

「岡田さんは、浣腸の経験は無いの。」

「ユイは、この前の実習でもする方だったし、未経験だって言っていました。」
ユカがあたしの代わりに返事をしてくれる。

「そうなの。女性には便秘症も多いから、日頃から浣腸のお世話になる人も多いんだけどね。初体験なら教えておいてあげるわ。液を入れても、しばらくは便意は来ないからね。そのままおとなしく寝ていてね。数分で便意の波が来るけど、ちよつと我慢すると波が引くからね。何回か波が来て、だんだん我慢するのも苦しくなるけど、限界までこらえてから、排泄するのよ。」

早く出しちゃうと、効果が中途半端になりますからね。便が残っていると、もう一度浣腸しなきゃならなくなるわよ。」

そんな事言われても、もうお腹の中はムズムズして、なんだか変な感じになって来ている。

まあ、ここで我慢できなくなつて、お薬が効かないうちに出しちゃったら、ほんとにもう一度浣腸される事になりそうだし、その時には、今度は別の人に、なんて言つて、鮫島先輩とかにやつてもらおうような事になりそうな予感もする。

あたしは、皆の視線を集めたまま、ベッドの上で横になつて、お腹の中の嵐の予感におびえていた。

そう言えば、ユカもユキリンも、浣腸実習で浣腸されたんだつたつて、なんて、あの時のことを思いだしながら。

ジャン。ここで、ユイが浣腸されて便意を堪えて、プルプルしている間に、わたくし、ユキリンこと長田由紀が、一年生の時にやつた浣腸実習のシーンをお届けいたします。

一年の時の実習は、基本的には四人一組でグループが固定されています。あたしたちの学年の看護専攻は六十人でそのうち七人が男子ですが、普段は出席番号順に男女関係無く四人ずつにされます。血圧とか脈拍とか注射なんかの場合ですね。四人ずつ十五組のグループになります。

ユイが前に話したと思うけど、看護の実習には、着替えや清拭、導尿や浣腸なんていうのも有りますから、そういう場合には、男女別にグループを組みかえます。

人数が半端なので、きちんと四人ずつにすると、男の子三人に女の子が一人だけ入るっていう組合せになっちゃいますけど、さすがにそれは出来ないから、その場合、男の子の

一組は三人で、女の子のどこかのグループが五人になります。

実習室はベッドが並んでいて、ひとつずつが病院の病室のようにカーテンで仕切られるようになっていきます。でも、カーテン一枚だから、隣で何をやってるか、雰囲気はわかっちゃいます。

男子のグループの隣だと、覗かれたりしないか、ちよつと不安にもなりますけど、彼らも真面目に実習をやってますし、そんな余裕は無い筈です。先生もあちらこちらを見て回って居ますしね。

それよりも、導尿の実習の時なんか、男子同士の会話が聞こえて来て、思わずそちらに気を取られてしまった。なんていう話もありました。

浣腸の実習は、一年生でも後期の終り頃、一月か二月だったと思います。

四人のうち、二人が浣腸する役で、二人が患者の役になって、実際に浣腸をします。

一人はガラスシリンダー、あの注射器みたいなのでちよつと先端だけが違うヤツですね。その先端にさらにネラトンカテールっていうチューブを付けて、グリセリンを100cc浣腸します。

もう一人はイルリガートル、点滴みたいにぶら下げるタイプので、こちらはちよつと多くて、石鹼水を500ccくらい入れます。

実習ですから液の調合からすべてやります。

今時は実際の現場で使うのは、ディスポタイプがほとんどで、こんな事をする機会は無いですけど、そこはまあ、基本を習うという意味で、面倒な準備もやらされます。

最近では、コーヒー浣腸なんていうのが普及して、イルリガートルなんて、家庭で使うほうが多いんじゃないかな。

この準備でも、手際が悪くて、液が適温にならなかったり、シリンダーに吸い上げたグリセリン液を床に撒いちゃったり、いろんな失敗が有ります。

あたし達のグループは、ワイワイトリオの三人に笠原さんという子が入ります。

ジャンケンで役割を決めて、あたしはユイにグリセリン浣腸をされました。そしてユカが笠原さんに石鹼浣腸をされたのです。

グループの中で順番にやりますから、一人がもう一人にやってもらっている処を、残る二人が見ているという事になります。だから、あたしの肛門はユイとユカと笠原さんの三人に見られちゃったのです。もちろん、ユカの番の時には、三人でしっかりユカのお尻の穴を覗き込みました。

恥ずかしかつたし、お腹は痛くなつたし、大変でしたけど、これも実習ですからね。

そうそう、この実習の時には、今回のユイみたいなパンツは用意されていません。

患者役の人は、患者用のパジャマに着替えるだけです。もちろん、施術側は白衣です。

そして、そのパジャマのパンツと下着とを、一緒に膝まで下げられて、浣腸されます。お尻むき出しですから、ある意味ではよっぽど今回より恥ずかしい格好です。

それに、下着を下げちゃうってことは、肛門だけじゃ無く、あそここの部分まで見えちゃいます。もちろん、実習の対象は肛門ですから、注意はそちらに向いています。視界にはその隣の秘密の部分も入って来ます。あたしもちらつと、ユカのあそこを眺めちゃいました。

まあ、柳瀬さんのように、拭いたり器具を入れたりしたわけじゃ無いんで、外側がちらつとくらいですけど。

ユカの番では、浣腸する笠原さんの手順は良かったんですけど、浣腸されるユカの方が、実際にちよつと溜まっていたらしくて、500ccが入り切る前から便意が来て、注入してるのにもじもじはじめて、大変だったみたいです。

この実習、正式には「浣腸および排泄介護」というテーマで、ベッドの上で排泄までするとかカリキュラムになっています。

患者さんの中には、絶対安静でベッドから一步も降りられない人も居ますから、差し込み便器で排泄させなければなりません。その練習も兼ねているのです。

浣腸だけでも恥ずかしいのに、クラスメートの前でうんちをしなければならぬのです。でも、これには裏話があります。代々、先輩から後輩に言い伝えられるのです。

「逃げ出してトイレに駆け込んで大丈夫よ。」

って。指導教官も、情状酌量でエスケープを大目に見てくれるのです。

「でもね、きちんと排泄までしたグループには、成績で優を付けてくれるのよ。」
ってという情報も伝わっています。

成績で優が欲しいのも事実ですけど、クラスメートの前で排泄したり、それを片付けたりするのと、成績とを比べて、たいいていの人はトイレにエスケープしますし、介護役も止めたりしません。

クラスの中には真面目ちゃんも居て、数人は最後まで決められたようにしますけど、あまり居ないですね。

ところが、このエスケープにも難点があります。実習室のある階の女子トイレには個室が八つしか無いのです。(男子トイレの個室は二つです)

十五のグループで、そのうち二つは男子。残る十三人の大部分が、ほぼ同時に浣腸されて、便意を堪えて、トイレに向かうのです。

「ねえ、エスケープしても良いよね。」

「そうよ、そんな恥ずかしい事、嫌でしょう。それにあたしだって、あなたの浣腸便の後始末するのは嫌よ。」

なんて前もって意思統一して有るグループは大丈夫です。
あたし達なんて

「どうせトイレでするんじゃ。あんまり無理な我慢しないで、早めに出しに行っちゃった方が良いよ。」

なんて話までして有ります。

でも、中には

「成績で優が欲しいから、恥ずかしいけどここでするわ。」

なんて言っていて、最後の瞬間に

「やっぱり嫌！」

なんて決心を翻す子が居たり、

「あなたが排泄しないと、私の成績も優が付かなくなるのよ。うんちくらい片付けてあげ
るから、ここで出しなさい。」

なんて言って、止めようとする子も居ます。

出遅れて、トイレに行ったけど、もう満室でした。なんていう状況にもなります。

海老共感、じゃ無くて、阿鼻叫喚（こう言う字だったのね、変換して出て来なかったら、
わかんなかったわ）の修羅場です。

ドアの前で、お尻を押さえて、足をもじもじさせながら、

「お願い、早く出て、交替して。」

って、泣いて懇願する風景が繰り広げられます。

歴代の逸話でも、そのままパンティーにおもらししちゃった話や、掃除用のバケツに跨
って出しちゃった話なんか、伝わっています。

私たちの時には、泣きながら実習室まで戻って来て、差し込み便器に排泄した子が居ま
した。まあ、その子は成績で優を貰ったから、ちよつとは慰めになったのですけどね。

ともあれ、あたしとユカは、実習で浣腸をされるという経験をしていますから、浣腸さ
れたらどういう感じになって、最後にはどうなるのかが解っています。

ユイは今回が初めてですから、さぞかしその違和感にショックを受けるんじゃないかと、
ちよつと心配もしています。

それにあたし達の場合は、女同士で三人だったけど、ユイは男性も含めて七人に見られ
ています。さすがに、ここで便器に出せとは言われませんが、恥ずかしさはかなりのもの
だと思えますよ。

まして、見ている中の一人は、ユイの憧れの鮫島先輩ですからね。

では、こんなところで、再び、海老のように丸くなって、（これを海老共感って言いま
す。・・・嘘です）便意と闘っているユイのシーンに戻りたいと思います。浣腸実習回想シ

ーンをお送りした担当はユキリンでした。

あくん！うんち漏れる！お腹痛いよ！もう我慢出来ないっ！！

というこどで、浣腸されてベッドの上で我慢させられてるあたしの話に戻る。

柳瀬さんは、手際良く液を注入した後、チューブをお尻の穴から抜き取って、脱脂綿を当ててくれた。

あたしは、先生と皆からの無言のプレッシャーを感じて、その脱脂綿を指先で押さえて、浣腸された時の姿勢のまま、ベッドに横になっていた。

しばらくすると、お腹がグルグルと動いて、うんちがしたくなってきた。何か悪いものを食べて、当たった時のような感じた。ちよつと我慢していると、その便意が治まって来る。

そしてまた気付くと、便意がもつと大きな波になって襲ってくる。そんな事を数回繰り返した。

ちよつと治まったけど、次の波では我慢が限界を超えちゃうかもしれない。そんなふうにしたんで、振り返って先生の顔を見た。

「先生。もう我慢が出来なくなりそうなんですけど。」

「そう。まだ四分ちよつとしか経ってないわよ。まあ、人によって我慢できる時間には差が有りますからね。いいわよ。トイレに行っても。」

「ほんとですか。」

「でも、トイレの中でも我慢出来る限りは頑張りなさい。きちんとお腹が綺麗にならないと、もう一回浣腸ですからね。」

「本当なら出たモノを確認して、綺麗になるまで何度も浣腸する場合も有るのよ。今回はそこまではしませんけどね。」

そんなふう脅されたけど、ここで我慢の限界を超えて、皆の前でおもらしでもしちゃったら、死ぬほど恥ずかしい事になる。あたしはお尻の穴の脱脂綿を押さえたままで、ベッドから起き上がって、処置室の向かいのトイレに駆け込んだ。

病院というのは、怖い処だ。処置室から一歩出れば、誰が通りかかるかわからない廊下だ。入院患者はパジャマ姿でうろろしているし、外来の患者は普通の格好してる。患者の付き添いやお見舞いの人なんかもそこに居るかもしれない。

入院患者さんなんて、パジャマの下には、ほとんど何も来ていないのと同じだ。女性の場合には、ほぼ全員がブラも付けずに、Tシャツ一枚。（診察だの検査だのっているんな事が有ると、ブラをいちいち付けたたり外したりもけっこう面倒なのだ。）男性ならパジャマの下は素肌って言う人も多い。

一方ではスーツにネクタイの見舞客も居る。そんないろんな種類の人が居て、誰がどう
いう人かも判らない街角のようなものだ。

そんな廊下を横切ってトイレに向かうあたしの姿は、普通ならば誰にも見せられない。
ミニ丈のガウンに、お尻に穴の開いた紙パンツ。そして肛門に当てた脱脂綿を自分で押
さえて、膝をモジモジさせながら、一目散にトイレに向かうのだ。

ちよつと想像力の有る人なら、こいつは浣腸でもされたんじゃないかって判ってしまう
だろう。まして、こういう処だから、医者や看護師もうろろしてる。そんな人だったら
一目で判る。

でも、そんな事を気にする事も出来ないほど、あたしは切羽詰まっていた。
ちよつと、処置室を出てトイレに向かう廊下の途中で、大きな波がやって来て、歩くのも
すり足で一步一步進むような、情けない状況だったのだ。

お年頃の可愛い女の子が、見ず知らずの人に晒してはいけないような姿を、披露してし
まったのだ。(自分で自分の事、可愛いつて言うなよ!・・・by エキリン)

トイレの個室に入り、便器に座って、これでおもらしの心配は無いつて、ホツとした。
お腹の中の波は小康状態になつてる。

もつと我慢しなきゃいけないよね。でも、今度の波は限界を超えちゃいそう。そんな心
の葛藤もあつただけけど、あたしの体は正直だった。

出せる体勢が出来ているのに、これ以上は我慢できなかったのだ。

アツと思つた時には、物凄い勢いで、お尻の穴から中身が噴き出して来ていた。腸が流
れ出てこぼれ落ちたような衝撃だった。

そして、その流出が一段落しても、お腹の中は変な感じが残っていた。

ここで出来るだけ中身を出しきつちやわないと、もう一度なんて言われたら困る。

そんな思いで、それからしばらく、あたしはトイレでいつのも様にふんばつてみた。

腸の奥の方に残った液だろう。ちよつと間を置いて、流れ出てくるものがある。二三度、
そんな排泄が有つたが、もう出そうもないと思つたので、お尻を拭いた。

なんとなく肛門も性器も、ちよつとヌルツとした感じで気持ちが悪かつたんで、ウオシ
ュレットできれいにして、トイレから出た。

皆はさっきの処置室の前で待つていた。あたしはとぼとぼと、その輪の方に向かう。

さっきの浣腸は前処理で、これからが本番なんだ。そう思うと、このまま逃げ出したか
つたが、逃げる気力さえ、湧いて来そうも無かつた。

鮫島先輩がこつちを向いてる。とても視線を合わせられない。浣腸だけでも恥ずかしい
のに、これからもつと恥ずかしい事をされるんだ。

あたしは誰かを怨むわけにもいかず、肝心な時に裏切つた、あたしのくじ運を呪つてい

た。

そのさん 「いやくん！お尻から内視鏡！」

あたし達のグループは、川浦先生に率いられて内視鏡室に入った。

あたしは、グループの一番後ろからトボトボと付いて行く。まるで屠畜場に連れて行かれる牛のような気分だ。

内視鏡室は個室に区切られていて、それぞれの個室にベッドや内視鏡とモニターなんか置いてある。

先生は普通に内視鏡の取り扱い説明とかをしてくれる。各自が触ってみて、手元のコントローラーのレバーを動かすと、先端が同じようにヒクヒク動く様子を見て、面白がっている。

あたしも手にしてみたが、これが今からあたしのお尻の穴から入るんだと思うと、悲しくなってくる。太さは人差し指くらいかな。黒くていやらしい、蛇のような形だ。説明によると、中には何本もチューブが通っていて、薬を入れたり、鉗子で中の細胞をつまんで生研サンプルを採ったり出来るそうさ。

もちろんカメラや照明も付いていて、画像も撮れる。動画まで撮る事も出来るそうさ。あたしはお腹の中まで照明を当てられて、撮影されるのだ。

先生はちよつとどこかに行つたと思つたら、イケメンの男性を連れて戻つて来た。

先生と同じくらいの年頃かな。白衣を着ているから、医師か検査技師なんだろう。

「はい、ここで皆さんに紹介します。今回の実習は、ある意味で一番難しい実習です。

お腹の中にカメラを入れるのですから、初心者がやって、サンプルの腸に傷をつけたりする危険性が有ります。そこで今回は、実際のカメラワークは、専門家にお願ひしました。」

えくん。先生と皆だけじゃなくて、また、恥ずかしい処を見られる人が増えたよ。

「消化器内科の西岡先生です。この人は、この病院で一番の腸の内視鏡の達人です。その腕前でゴッドハンドとかゴールドフィンガーとか呼ばれてるんですよ。」

なんだか、先生は紹介しながら嬉しそうさ。

「もっと別のニックネームも有るけどね。」

西岡さんはボソッと呟く。

「それも言っちゃって良いの。」

「どうせ、今言わなくても、後で授業のネタにするんだらう。」

「じゃあ、紹介するわね。この西岡さんは『最優秀アナリスト』とも呼ばれています。」
皆なんとなく意味に気付いたのだらう。ザワザワとニヤニヤが同時に起こった。

「アナリストって分析者っていう意味ですよ。」

西岡さんは、カメラ画像を見るだけで、病変部の判断を下すのが得意なんです。今までの経験から、腸の中の腫瘍が良性なのか、悪性の癌なのか、見ただけで、ほぼ正しい判断が下せます。もちろん、生研サンプルを採って、きちんと確認する作業はしますけどね。」

「それだけじゃ無いだらう。アナルと引っかけたそう呼んでるのは、誰でも解るだらう。」

「まあね。でも、あなたがこの病院で一番沢山、患者の肛門を見てるのは事実でしょう。これは褒め言葉なのよ。」

「どうかな。面白がって言ってるんじゃないのかな。そう呼んで、僕にカメラの仕事をまわして来る口実にしてるんじゃないか。」

そう言うって西岡さんは自嘲的に笑う。

「まあ、そのおかげでこんな可愛い学生さんにも、腸カメラを入れる役がまわって来るんだから。役得かもしれないね。」

きゃ〜ん。あたしのことを、可愛いって言ってくれた。でも、このイケメンさんに、今からお尻の穴を捧げるんだわ。やだ〜、恥ずかしい！

「ということで、今から大腸内視鏡の実践を行います西岡です。よろしく。」

そう言うってにつこり笑う。ほんとに良い男だわ。

「さあ、じゃあ、岡田さん、お願いしますね。」

そう言う川浦先生に促され、あたしはベッドに上がる。さっき浣腸されたのと同じポーズで寝かされる。

「大丈夫よ。そんなに緊張しなくても。西岡さんは上手だし優しくやってくれますからね。」

私も何度かお世話になったから、そのテクニクは保証するわよ。」

先生はあたしの耳元にそう囁く。

えっ！先生も西岡さんにお世話になったって。それって、こういうふうにかメラを入れられたって事なの。病気したのかな。検診なのかな。あたしみたいに実習のサンプルにもなったの。それともまさか、プライベートで。柳瀬さんと彼氏さんみたいに。

あたしは一瞬のうちに、いろんな想像をめぐらしてしまっ、思わず先生の後ろ姿を見つめてしまう。

白衣に包まれたお尻の、丸みを帯びたラインは、とっても色っぽく見えた。

ベッドの下にはモーターが組み込まれているらしい。あたしが乗って、西岡さんが何か操作すると、ベッドが上がり始めた。作業しやすい高さまで上がるのだらう。

皆の視線が近くなって、あたしのお尻は、見降ろされる角度から、横から覗き込まれる

ような高さの位置に変わってしまう。

モニターはあたしの頭の方に有る。患者さん自身にも状況を見させて、その場で説明をしながら、検査を行うためなんだろう。それに向き合うように、皆はあたしの下半身側に集まる。

やくん。お尻の穴が良く見える方に行っちゃダメ！

西岡さんはカメラの照明を点滅させたり、先端をクネクネと準備運動のように動かしたりした後、おもむろに、ワセリンの小瓶を開け、ゴム手袋をした指先で搦うと、あたしの肛門にそれを塗り付けた。

ヤダヤダ、指でそんなところに触っちゃ、なんて思うけど、これも内視鏡検査のルーチンなんだろう。

「じゃあ、カメラを入れますよ。痛くはないと思うけど、ゆっくり入れるからね。」
そう言つて、カメラをあたしのお尻に近づける。

カメラ画像はオンになつてから、モニターにはカメラが捉えた画像が映る。

モニターの中で、菊の花弁のような、あたしの肛門がアップになる。

キヤー！こんなアップで、こんな映さないで！恥ずかしいよ。

カメラの先端が、お尻の穴に触れた。お尻の穴がプニュつていう感じで広がる。次の瞬間、スルツとあたしのお尻はカメラを受け入れていた。

違和感が無いわけじゃない。さっきの浣腸よりは太いものが侵入してる。でも、そんなに苦痛は無い。普段の一方通行を逆行している感覚が、ちよつと変に感じるだけだ。

「カメラの径は、普通の健康状態の便なんかより細いはずだから、挿入した時にも、苦痛は無いはずです。まあ、普段は出るだけの処から入れているから、変な感じはするでしょうけどね。」

光に照らされたあたしの腸は、健康そうなピンク色してる。つていうか、肉に皺ひだが付いているから、モツとかホルモンとかを想像してしまうような形状だ。その肉のトンネルを、カメラが少しずつ先に進んで行く。

「カメラの先にはいろんな管が付いています。腸の中でカメラを前進させるには、ちよつと腸を拡げてやると、進みやすくなります。その為に、管の一本で先端に空気を送って、風船を膨らますようにして、空間を確保して、カメラを進めるんです。」

川浦先生は、カメラの画像を見ながら、そんな解説をする。西岡さんは、ゴムのポンプのようなものを、手でカメラにつなぎ、何度かそのボールを押す。

お腹の中には、風を感じるような神経は無いと思つたけど、あたしは、お腹の中でひやっと冷たい空気が動くのを感じた。

曲がり角では上手に方向を変えて進むが、やっぱり角に当たっているようで、ちよつとだけ痛かった。少しずつだけど、入れられた空気が溜まって。お腹が膨らんだような気がする。まあ、さっきの浣腸に比べたら、まだ苦しいっていう程じゃないけどね。

「入れる時は、周辺観察はあまりしないで、規定の位置まで挿入する事に専念するんだ。注意が散ると危険だからね。そして、奥まで入ったら、ゆっくりと引き抜きながら、腸の内壁を観察して、病変が無いか、探すんだよ。」

西岡さんもそんなふうには、説明してくれる。

どの辺りまで入ったんだろう。おへそより上側くらいの処のような気がする。

今までピンク色だった洞窟の奥に、なにか黒っぽいものが見えてきた。

これって何、まさか、あたしのお腹の中に、悪い病気があるの。

「ねえ、シシャモ？」

川浦先生が西岡さんに話しかける。えっ、それって何なの。はっきり病名も言わないで、隠語で言うような悪い病気なの。あたしは怖くなってしまふ。

「そうだね。シシャモだね。間違いないよ。」

西岡さんは、ちよつと笑いを堪えたような表情で、川浦先生に向かって答える。

「先生。シシャモって何ですか。」

ユカがはつきりと質問する。

「あのね、それはこの内視鏡室だけの隠語なの。」

先生もおかしそうに答える。

「シシャモって聞いて、何を連想するかな。」

「子持ちシシャモです。」

ユキリンがいきなりそんな答を出す。

「そうね。それが正解です。つまりそう言う事なのよ。」

ええっ。あたしはお魚じゃないし、妊娠してる覚えも無いし、(そうなるような事も未経験の、膜付きなんだからね。) どういう事なの。マリア様じゃ有るまいし。

ユカやユキリンも、頭の上にハテナマークが出ている。

そんな会話を聞いて、柳瀬さんがクスツと笑う。

「柳瀬さんは気が付いたようね。じゃあ、皆に解説してあげてくれる。」

先生に言われて、柳瀬さんが口を開く。

「それって、お腹の中に子が居るって事ですよね。」

だから、あたしは妊娠なんてしてないし、だいたい腸の内視鏡で妊娠が判るとは思えない。

「お腹の中、腸の中に『こ』が居るんですね。××こが。」

ぎゃあ〜！そういう意味だったのね。つまり、カメラの進む先には、さっきの浣腸で出しきれなかった便が残ってたんだ。カメラでアップにされて、お腹の中のうんちがモニターに大きく映し出される。

「こういう場合には、もう一度浣腸して、お腹を綺麗にしてから検査をします。でも、便が残ってるのは、お腹の奥のこんな場所ですから、さっきのように肛門から液を入れただ

けじゃ、効くかどうか判りません。それにカメラがここまで来てるんですから、このカメラを使います。」

川浦先生がそんな解説をしてる間に、西岡さんは注射器のようなガラスシリンダーを用意して、それに液を満たす。カメラの操作部の管につなぎ、無造作にピストンを押し、液を流し込む。

モニターの画像の中では、ピンクの洞窟に川が流れ込む様子が映っている。あたしのお腹では、臍の横くらいのあたりで、なにかちよつと冷たいものがチヨロチヨロと流れて行く感じがした。

「さっきの浣腸とは違って、ここまで奥に直接入れるんだから、液は蒸留水です。まあ、状況によっては石鹼水や生理食塩水なんかも使う場合もあるけどね。量をちよつと多めにに入れて、水の流れる勢いで便も一緒に出させるような感じかな。」

そう解説しながらも、シリンダーに水を満たしては、あたしの中に流し込む作業を、なんだか繰り返し返す。お腹の奥の方に入れられてるから、さっきの浣腸とは違う感じだ。

「じゃあ、このくらいで良いかな。さっきの前処置と同じように、我慢できなくなるまで待つて、トイレで出して来て下さいね。」

そう言いながら、カメラのチューブがスルスルと抜き取られる。

お尻の穴を滑るように出て行く感触が、ムズムズして、気持ち良いかも。あたしったら、まだ膜も失っていないのに。お尻の快感に目覚めちゃうのかしら。なんて、余計なつまらない事を考えてしまった。

しばらくそのまま横になっていた。さっきのグリセリンの感じと違って、お腹が痛くはならなかったけど、お腹が重くて、うんちがしたいような感じになって来る。無言のまま見つめる皆の視線が重たい。

「そろそろ、トイレに行っても良いですか。」

先生に訊ねると、先生は無言で頷いた。

さっきよりは落ち着いて、トイレに向かう。二度目だから慣れたのか。入れた液が違うから、効き方も違うのか。さっきの漏れそうな程のきつい便意は来ない。廊下を横切ってトイレに向かう時も、周囲の様子を気にしながら歩ける。そうなると逆に、さっきのあたし自身の様子が思いだされて、ここをあんな様子で歩いたのかと、恥ずかしく思ってしまった。

今回はトイレの中でも落ち着いていられた。便意が激しく無かったので、けっこう長く我慢が出来たと思う。入ったものが出てくるんだから当然なんだけど、カメラを入れる時に腸を膨らます為に入れた空気も、一緒に出てくる。

プウとかブツとか、効果音付きだ。誰も居ないトイレの個室の中で、一人で赤面してしまう。

出してる最中に隣の個室に誰かが入った気配がした。ちよつと緊張してお尻の穴がキュッと締まってしまった。でも、そんな事を気にしている余裕は無い。皆が待っている。もう一度、あの台の上で、お尻の穴を神聖な使命の為に提供しなければならぬのだ。なんて言うのが格好良く聞こえるけど、あたしはもう、半分ヤケで、早くこの実習の時間が終わる事だけを願っていた。

恥ずかしさに負けずに、腹圧をかけて中身を絞り出すように頑張つて、一区切りがついて便器を眺めたが、出たのはほとんど液体成分だけ。黄色く濁った水だけだった。

お尻を拭いたけど、なんだかヌルヌルする。さつきカメラを入れる時に塗った潤滑剤なんだろう。ウオッシュレットできれいにしようかと思つたが、どうせもう一度カメラを入れられるんだから、と思い、そのままトイレを出た。

二度もトイレで排泄をすると、体はぐったりしている。下痢で脱水症状になったような感じだ。まあ、本当の病気では無いけど、浣腸されて、腸の中のうんちを強制的に出すつて言う事は、人為的に下痢状態にしてるのと同じだろうから、体力も使うのだろう。

毎日、こんなふうに浣腸したら、体力消耗して痩せるかな。なんて、馬鹿なことを考えてしまう。

体力も落ちると、気力も萎える。お尻の穴を見られて恥ずかしいとか、嫌だとかいう気持ちも、次第に麻痺してくる。あたしは、トボトボと内視鏡室に向かいながら、半分投げやりな感情に陥っていた。

もう、お尻の穴だろうと、あそこの穴だろうと、好きにして！見るなら見れば！カメラでも浣腸でも、入れていいわよ！そんな感じだ。

内視鏡室で、さつきと同じように台に上がり、さつきと同じ手順でカメラを挿入される。もちろん、皆に見られながらだ。恥ずかしいけど、もう逆らう気力も体力も無く、されるがままに従順に検査実習のサンプルの役目を果たす。

決まった位置までカメラが入れられた後、ゆっくりと引きだされ、あたしの腸の内壁の様子がモニターに映し出される。特に病変も無く、綺麗なピンク色の壁がモニター画面に広がる。

お尻の穴をカメラの先端が通過する時だけは、押しひろげられていた肛門が、ピクツと反応して、キュツと縮んだのが判つた。ちよつと気持ち良いかもしれない。セックスであそこに入れられるのも、こんな感じなのかな。なんて、セクシーな事まで連想してしまう。

ようやくサンプルの役目から解放されたあたしは、検査衣から着替える為に更衣室に向かう。

そのあたしを、後ろから柳瀬さんが呼びとめる。

「ユイちゃん、お疲れ様。着替える時にこれを付けておいた方が良いわよ。」
そう言って、そっと手渡してくれたのは、生理用のナプキンだった。

「あの、あたし、生理じゃ無いんですけどお。」

「そうじゃ無くて、お尻の穴の方から、なにか残留液でも出てくると困るから、ちよっと後ろの方に、当てておきなさい。」

「ありがとうございます。」

「いいのよ。私も実習で失敗して、下着を汚しちゃった事があったの。」

あれれ、確か医学科は基礎実習はやらないんじゃないなかったっけ。どこでそんな実習をしたんだらう。

もしかして、この前想像したように、彼氏さんと二人で、自主的にお勉強したのかな。

まゝ、いやらしい。いや、うらやましい。あたしもそういう事ならしても良いな。二人だけのお医者さんごっこだ。

数時間後、このナプキンは、実際役に立った。空気を入れられた名残で、なんだかおならが連発していたんだけど、そんな事が続いて油断してた頃に、プツっておならしたつもりが、チョコピツと、雫が流れ出るのが感じられた。

お腹の中に、空気や浣腸液をあんなに入れたのだから、全部出したつもりでも、ちよっとくらいは、残っていたんだらう。せつかくの新品の勝負パンツを汚さずに済んだ。

着替えて来て、実習のまとめをして解散になった時に、鮫島先輩もあたしに声をかけてくれた。

「ユイ。大変な実習で辛かったらう。良く頑張ったな。」

そういって、頭をなでなでしてくれる。

きやく。先輩がそんな事してくれるんなら、ユイ、頑張っちゃうもんね。もう一度、こんな実習が有ったとしても、サンプルになってもいい。

先輩がこの実習の復習したいなら、専属でサンプル志願しても良い。なんて、馬鹿な事まで考えてしまった。

そして、あたし達三人は一緒に帰りに向かう。医学科では、これから何か講義が有るのだらう。鮫島先輩は、あたしに背を向け、医学科棟に向かう。

あたしは、名残惜しくて、振りかえり振りかえり、鮫島先輩の後ろ姿を見つめ、ユカとユキリンの後を追う。

その時だ。

後ろ姿の鮫島先輩に誰かが寄り添う。だれ？

わざわざ待っていたかのように近づく女の影。あの姿は、さっきまで一緒だった柳瀬さ

んだ。

ガーン!!!二人で、仲良さそうに手を繋ぎ、何か話している。

ええっ!そんなく!なんで、なんで、あの二人が、そんなに親密そうにしてるの。

もしかして、あの二人って、そういう関係だったの。柳瀬さんが膜を無くしちゃったり、婦人科の実習でサンプルになったりした相手って、先輩だったの。

それどころか……。あたしの頭の中に、疑惑の黒い雲が広がる。さっき、ナプキン渡してくれた時のセリフ。浣腸の実習も経験者なんだよね。

たしか前に、お尻の穴はもつと恥ずかしいなんて、言ってたよね。その経験した相手って、もしかして。

ヤダ、ヤダ、ヤダ。えくん、先輩も柳瀬さんも、そんな関係なんて。あたしが居るのに、ヒドイ!

(あら、お似合いのカップルじゃない。ユイ、あんたのは単なる片思い、憧れだけだったのよ。。。byユキリン)

あたしは、半べそで、ユカとユキリンの背中を追いかけ、二人の腕にしがみついた。

「ねえ。お茶していかない。お腹の中のものを、全部出しちゃったから、お腹すいちゃった。もちろん、二人でおごってくれるわよねえ。」

了

SPACE 銀河